



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	介護保険施設入所要介護高齢者に対する歯科衛生士による口腔健康管理と食形態の維持または改善との関連：1 年間の多施設縦断研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	稲本, 香織
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第15952号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92543
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kaoru_Inamoto_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（歯学） 氏 名 稲本香織

審 査 担 当 者	主査	教授	山崎	裕
	副査	教授	岩崎	正則
	副査	教授	北川	善政
	副査	准教授	渡邊	裕

学 位 論 文 題 名

介護保険施設入所要介護高齢者に対する歯科衛生士による口腔健康管理と食形態の維持または改善との関連：1年間の多施設縦断研究

審査は、主査、副査を含めて公聴会として行われ、先ず論文提出者が論文内容の要旨を説明した。その後、内容について審査担当者が質問し、論文提出者が回答する形で進められた。以下に論文内容と審査の要旨を述べる。

現在、介護保険施設入所者の約半数には誤嚥防止の観点から嚥下調整食が提供されている。しかし、嚥下調整食の使用にかかわる問題として、食事の見た目や味が悪いこと、栄養価が低下することが指摘されている。また、これらの問題は入所者の健康状態や生活の質の低下に関連する可能性がある。したがって、介護保険施設入所者の食形態を維持または向上を図ることは重要な課題であると思われる。介護保険施設入所者を対象とした先行研究では、定期的な歯科訪問診療と体重減少が抑制されることとの関連や、歯科衛生士による口腔健康管理（OHM）と肺炎発症率が関連し、その予防効果を示唆している。また、介護保険施設入所者の体重減少と食形態が常食から嚥下調整食に移行することが関連しており、OHMを行うことにより食形態を維持することは摂食嚥下機能が維持・改善され、低栄養の防止や肺炎の予防に有効である可能性も示されている。しかし、我々の一連の研究ではまだ OHM と食形態の維持または改善との直接的な関連は明らかにしていない。

そこで、学位申請者は、介護保険施設入所者において「OHM は食形態の維持または改善に資するか」を明らかにすることを目的に、「OHM を行うことにより、摂食嚥下機能の維持または改善を通して食形態を維持または改善し、低栄養を予防し肺炎発症を抑制する」との仮説を立てた。そして 2018 年、2019 年の調査に参加した日本の 25 の介護保険施設を対

象に、入所者の OHM の実施状況と食形態について多施設縦断調査を実施した。

2018 年に基礎情報、既往歴、栄養摂取量、OHM および経口維持管理の実施状況、食形態、口腔の状態を調査し、2019 年に 1 年後の食形態を調査した。参加者のうち、経口摂取をしている者で、栄養摂取状況が良好かつ OHM の実施対象者であることに該当した 273 名 (30.7%) を本分析対象者とした。対象者の摂取していた食形態については日本摂食嚥下リハビリテーション学会が提唱した学会分類 2013 を参考に、嚥下調整食と常食の 2 段階に分類した。常食群から 1 年後に嚥下調整食に移行した群、常食を維持した群、嚥下調整食群から嚥下調整食を維持した群と常食に改善した群の 4 段階に分類し、さらに常食を維持した群と常食に改善した群を合わせた群と嚥下調整食に移行した群の 2 群を最終分析対象者とした。

解析は対象者の年齢、性別、OHM の実施、BMI、BI、CDR、嚥下機能、現在歯数、肺炎の既往、うつ病の既往、経口維持管理の実施とし、1 年後の食形態の維持・改善を従属変数として、二項ロジスティック回帰分析を用いて行った。

最終分析対象者は 188 名であり、そのうち OHM の実施は 76 名 (40.4%) であった。解析の結果、OHM の実施 (調整オッズ比[OR] : 2.15, 95%信頼区間[95%CI] : 1.08-4.29 ; p-value=0.030) , うつ病の既往 (OR : 5.27, 95%CI : 1.37-20.30 ; p-value =0.016) が有意に関連していた。本研究の結果、OHM の実施が食形態の維持または改善と関連することが示された。以上より、定期的に OHM を行うことで食形態の維持または改善、すなわち摂食嚥下機能が維持改善され、栄養状態の維持から肺炎予防につながるメカニズムの解明に資する一つの根拠を得ることができた。

上記の論文内容及び関連事項について、以下の項目を中心に質疑応答がなされた。

1. うつ病の既往のある人で食形態が有意な関連を認めた理由について
2. 嚥下調整食の分類の世界的な基準について
3. OHM 実施の施行基準について
4. 経口維持管理の対応方法について
5. 研究結果の解釈について
6. 本研究の研究方法
7. OHM と食形態の間にある摂食嚥下機能を支持するデータについて

これらの質問に対して、学位申請者から明快な説明と回答が得られ、さらに今後の研究に対する展望が示された。

学位申請者の研究により介護保険施設入所者において、OHM の実施が食形態の維持また改善に資する可能性が示された。本研究の内容は OHM のさらなる普及と発展に寄与するものと評価され、審査担当者全員は、学位申請者が博士 (歯学) の学位を授与されるに相応しいと認めた。